

木 山 廃 寺 跡

福岡県京都郡犀川町所在遺跡の調査報告

1 9 7 5

犀 川 町 教 育 委 員 会

木 山 廃 寺 跡

福岡県京都郡犀川町所在遺跡の調査報告

序

木山廃寺跡は犀川町農業振興地域整備計画における圃場整備事業のモデル地区内にあり、当事業計画の延期等の措置が困難であるため緊急発掘調査を行ったものである。

この調査は県文化課に依頼し、国県の補助事業として行なわれました。この間文化庁は勿論福岡県，同文化課，九州歴史資料館，地元の関係機関の御理解と御協力により発掘調査が完了いたしましたことに対して心より感謝いたします。

昭和 50 年 3 月 31 日

犀川町教育委員会

教育長 角 田 壤 吉

例 言

1. 本書は、昭和49年11月5日から翌年1月9日までの間に、福岡県京都郡犀川町大字木山および谷口に所在する廃寺跡と古墳群の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、犀川町教育委員会が主体となり、福岡県教育委員会文化課係長松岡史、同技師宮小路賀宏・浜田信也および九州歴史資料館技術主査石松好雄が担当した。
3. 本書の執筆分担は次のとおりである。

第1	浜田信也
第2	宮小路賀宏
第3—1	石松好雄
—2	浜田信也
—3	松岡史, 前田軍治
—4	松岡史
4. 本書の編集は浜田信也が担当した。

本文目次

第1 序説	1
第2 遺跡の位置	3
第3 遺構・遺物の概要	3
1. 木山廃寺跡	3
2. 谷口1・2・3号古墳	9
3. 谷口大無田古墳	16
4. 木山廃寺跡出土輪蔵心礎	18

図 版 目 次

- 図版 1 (1) 木山廃寺跡付近航空写真
- 図版 2 (1) 木山廃寺跡・谷口古墳(1～3号)遠景(西から)
(2) 木山廃寺跡・谷口古墳(1～3号)近景(東から)
- 図版 3 (1) 木山廃寺塔心礎
(2) 木山廃寺跡Aトレンチ(北東から)
- 図版 4 (1) 木山廃寺跡Bトレンチ(南東から)
(2) 木山廃寺跡Cトレンチ(南東から)
- 図版 5 (1) 木山廃寺跡出土土師器
- 図版 6 (1) 木山廃寺跡出土瓦
- 図版 7 (1) 木山廃寺跡出土瓦・須恵器
- 図版 8 (1) 谷口1号古墳(北西から)
(2) 谷口1号古墳石室(北西から)
- 図版 9 (1) 谷口2号古墳(南西から)
(2) 谷口3号古墳石室(南から)
- 図版 10 (1) 谷口3号古墳石室(南から)
(2) 谷口3号古墳石室(東から)
- 図版 11 (1) 谷口大無田古墳遠景(東から)
(2) 谷口大無田古墳正面(南から)
- 図版 12 (1) 谷口大無田古墳石室内部
(2) 谷口大無田古墳墓道出土須恵器

插图目次

第 1 图	木山廃寺跡付近遺跡分布図（浜田信也作成）	2
第 2 图	木山廃寺跡地形図（浜田・山本信夫実測，浜田製図）	4
第 3 图	木山廃寺跡出土塔心礎実測図（山本信夫実測，浜田製図）	6
第 4 图	木山廃寺跡出土土器実測図（石松好雄実測・製図）	7
第 5 图	木山廃寺跡出土軒先瓦拓影・実測図（石松実測・製図）	8
第 6 图	木山廃寺跡出土丸・平瓦斜格子叫き目拓影（石松手拓）	9
第 7 图	谷口 1～3 号古墳地形図（石松・宮小路賀宏・浜田実測，浜田製図）	10
第 8 图	谷口 1 号古墳石室実測図（宮小路実測，浜田製図）	11
第 9 图	谷口 3 号古墳発掘区実測図（浜田・荒牧重夫実測，浜田製図）	12
第 10 图	谷口 3 号古墳石室実測図（宮小路実測，浜田製図）	13
第 11 图	谷口大無田古墳実測図（松岡史・前田軍治実測，浜田製図）	14
第 12 图	谷口大無田古墳石室実測図（松岡・前田実測，松岡製図）	15
第 13 图	谷口大無田古墳出土須恵器実測図（松岡実測・製図）	16
第 14 图	木山廃寺跡出土輪藏心礎実測図（松岡実測・製図）	18

第 1 . 序 説

木山廃寺跡は、同和対策事業に係る圃場整備事業にともなう埋蔵文化財の緊急発掘調査として、工事の実施主体者である犀川町が、総額 150 万円の国庫補助を受けて実施した。

調査員の構成は次のとおりである。

庶務会計	犀川町教育委員会教育長	角田 壊吉
	同 教務課長	吉田 勇雄
	同 主事	荒牧 重夫
	同 文化会館係長	野口 富雄
調査担当者	福岡県教育委員会文化課係長	松岡 史
	九州歴史資料館技術主査	石松 好雄
	福岡県教育委員会文化課技師	宮小路賀宏
	同	浜田 信也
	福岡県文化財管理調査員	前田 軍治
	調査補助員	山本 信夫

木山廃寺跡は、圃場整備事業に先だち、事前の発掘調査の実施ということで、昭和49年11月5日から翌年1月9日までに調査を行った。

調査の実施にあたっては、事前に町の圃場整備事業の担当課と協議し、木山廃寺跡と考えられる地区の盛切りの変更をお願いし、木山廃寺跡の保存を前提とし作業を進めることとした。

調査は、圃場整備事業によって盛土に必要な採土工事によって削られる谷口の低台地に所在する谷口1～3号墳の発掘調査から始めた。これらの古墳は既に開墾等によって墳丘はほとんどなく、出土品の発見もなかった。古墳の調査がほぼ終了したところで、木山地区の調査に入った。調査の目的は、廃寺跡の保存ということで、廃寺の寺域を確認することを第一義とし、A・B・Cの3本のトレンチを設定し、A・B・Cの順で作業を進めた。結果は寺域を示す遺構および寺跡と考えられる確な遺構の検出はなかった。

しかしながら、当地区において、明治9年頃の土地改修の際に塔心礎が発見されており、寺跡があったことは疑いなく、当初の計画どおり、圃場事業の設計変更を行い、推定地区の削平を実施せず保存することで調査を12月5日に終えた。

その後、設計変更により盛土の不足が明らかとなり、谷口字大無田地区から採土運搬することとなった。分布調査の結果、当地区に円墳1基が存在することが確認され、12月29日から翌年1月9日までの間調査を実施した。

こうして、全ての発掘調査を終了した後、圃場整備事業は順調に進行していたが、1月20日頃に、木山地区のAトレンチに非常に近いところから輪蔵付経蔵の発見の報告が入り、町と協

議の結果、当地区において保存することとなった。

第2. 遺 跡 の 位 置

行橋市から国鉄田川線に乗ると、汽車は今川に沿って動き出す。豊津駅あたりから急に平野が狭まり、ここを通過すると犀川駅に到着する。駅を中心に静かな小平野と犀川町が開け、西には飯岳山、遠く南には英彦山を中心とする山脈がまるで屏風のように立ちはだかっている。今川はこの英彦山に源を発し、犀川の平野と行橋平野を造って周防灘にそそぎ、今でもその清流には、夏には子供達が水遊びを楽しんでいる。

遺跡は、町の西側山間部に位置し、今回調査し報告する遺跡は3地点に分れ、行政上では次のような位置にある。

木山廃寺跡——福岡県京都郡犀川町大字木山 591 番地外（第1図7）

谷口1～3号古墳——福岡県京都郡犀川町大字谷口 308 番地外（第1図6）

谷口大無田古墳——福岡県京都郡犀川町大字谷口字大無田 664 番地（第1図4）

犀川町に所在する遺跡は、平野に面する山麓の縁辺に遺存し、古墳時代においてその数量が増大する。町内には姫神・大熊の2基の前方後円墳があり、数ヶ所に古墳群が造られている。最も巨大であるのは、谷口1～3号墳を含む谷口古墳群及び木山古墳群である。歴史時代に至っては、木山廃寺の瓦を焼成した福六瓦窯跡が関連遺跡としてあげられる。

これらの遺跡が物語る歴史は、ただ今川と今川が造り出したこの小平野によってなされたものばかりではなく、隣接して豊前国分寺跡の所在する豊津町があるごとく、豊前地方と田川・嘉穂地方との連絡路上にあることも大きな要因として考えるべきであろう。

第3. 遺構・遺物の概要

1. 木 山 廃 寺 跡

木山廃寺跡は、今川の支流松坂川が造る扇状地の先端に位置する。当寺跡は早くから知られているが、それは当地区を明治9年頃に土地の改修事業を行っており、この時に多量の瓦が出土し、また塔心礎等が出土したことによってここに寺院跡等の建築物があったのであらうと伝えられていた。寺院跡の規模等を知るに足る遺構は、この土地改修事業によって消滅し、現

在その規模を知るに足る資料等は残っていない。

しかしながら、現在木山・谷口地区には、道町・堂町という小字名が残っており、寺院跡の地区をほぼ判断できる。



第 2 図 木山廃寺跡地形図 (1/1500)

今回の調査は、この地域に対して昭和49年度事業として圃場整備事業が実施されることとなったため、その事前調査として遺構の存在を確認することを調査の主な目的として行った。したがってトレンチの設定にあたっては、整備事業計画に基づき水路予定地などの深く掘削が行なわれ、遺構の破壊が予想される個所に重点をおいてAトレンチ（3×76m）、Bトレンチ（3×114m）、Cトレンチ（3×24m）の3本を設定し調査を行った。

遺構 今回の調査で検出した主な遺構は瓦溜り、溝などである。これらの遺構はすべてAトレンチにおいて検出したものでBトレンチ、Cトレンチにおいては何らの遺構も検出できなかった。

瓦溜りは、Aトレンチの東半部において検出したもので、規模はトレンチの外にのびているため不明であるが、深さは約80cmほどである。この瓦溜りからは軒丸瓦、軒平瓦をはじめとして、丸・平瓦を多量検出した。またAトレンチ中央部で検出した溝は幅約2mで、深さは約80cmである。この溝からも少量の丸・平瓦を検出した。この溝がどのような状況でのびるのかは今回追求できなかったが、寺院跡としての遺構とは直接的には関係ないものと考えられる。

このように今回の調査においては寺院跡としての遺構は何ら検出されず、また地層の状況から判断して遺構はすでに削平されてしまっている可能性が強いと考えられる。

心礎（図版3-1、第3図） 今回の調査において寺院跡としての遺構は何ら検出されず、また周辺の地形からみて遺構は全て削られてしまっている可能性の大きいことが明らかとなった。ただ寺院跡としての遺構に関連する塔心礎が遺跡の東北に接してある木山部落の中に残されている。

これは第3図に示す如く石碑に使用されているもので、塔心礎をほぼ半分に分ったものである。長さ1.8m、最大幅0.9m、厚さ0.8mの花崗岩である。心柱を嵌める切り込みの残存部は、少々いびつであるため正確さを期しがたいが、復原すると直径約55cm前後、深さ15cmであろう。心柱の切り込みとしてはかなり小さいものである。

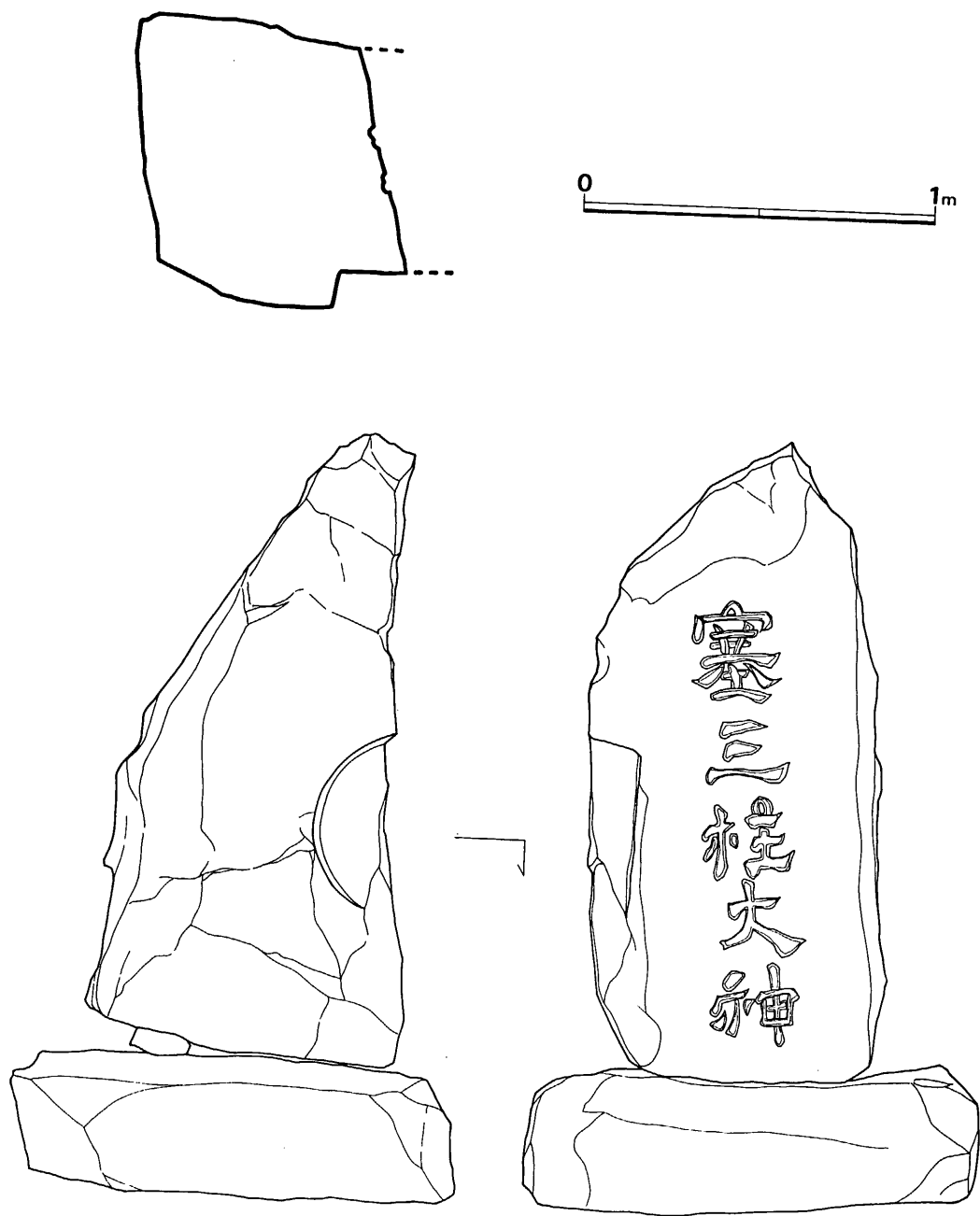
この心礎の側面には「明治九年丙子四月」と刻まれており、この心礎が動かされた時期を推定する一つの資料となる。

また今回調査を行った地域の一画に小さな祠があり、ここにも小さな破片であるが心礎の一部が残されている。

遺物 今回の調査で出土した遺物は、土器、瓦類である。これらの遺物は主にAトレンチの瓦溜りおよび溝状の遺構から出土したもので、Bトレンチ、Cトレンチでは少量の土器片、瓦片を検出したにすぎない。特にAトレンチの北半部で検出した瓦溜りからは多量の丸・平瓦とともに軒丸瓦、軒平瓦を検出した。

土器は細片が多くまとまったものは少ない。第4図に示したものが主なものである。須恵器は1点で他は土師器である。

1は円面硯で4分の1程の破片で脚部および周縁の立ちあがりを欠損しているが復原すると



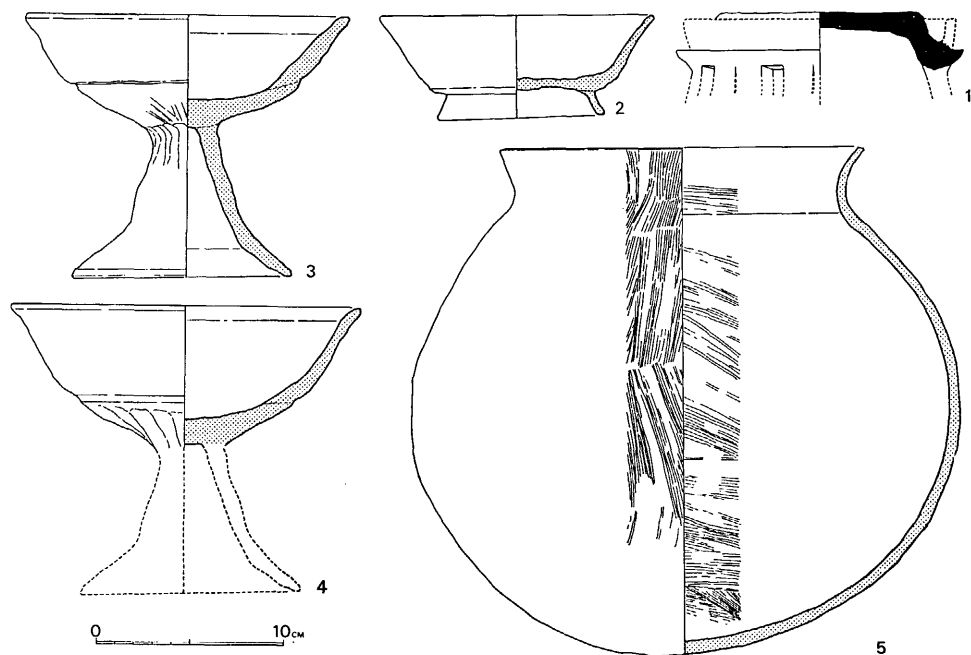
第 3 図 木山廃寺跡出土塔心礎実測図 (1/20)

径約14.5cmになる。脚部には短冊形の透しがあり、9個になると考えられる。透しの間には篋による沈線が施こされている。陸部には使用痕らしきものは見当らない。胎土は小さな砂粒を多量に含み比較的粗い。焼成は堅緻である。

2は高台付の坏で、体部はわずかに外彎する。高台はやや高く、開き気味である。底部には篋切り痕が見られ、他は横ナデによって仕上げている。胎土は小さな砂粒を含み、焼成は堅緻で淡茶色を呈する。3・4は高坏で、形態はきわめて類似している。口縁部は若干外反し坏部の粘土つぎ目に沈線が走る。全体的に器肉が厚い。坏部の内外面は横ナデで仕上げ、脚部は篋ナデによっている。胎土は砂粒を少量含み、焼成は良好である。5は丸底の甕で、口縁は短く立ちあがる。胴部は張りが強く、底部は丸底である。胴部には刷毛目が顕著である。胎土には粗い砂粒を少量含み焼成は堅緻である。

瓦類のうち軒先瓦は総数75点である。このうち軒丸瓦は2型式29点、軒平瓦は2型式46点である。

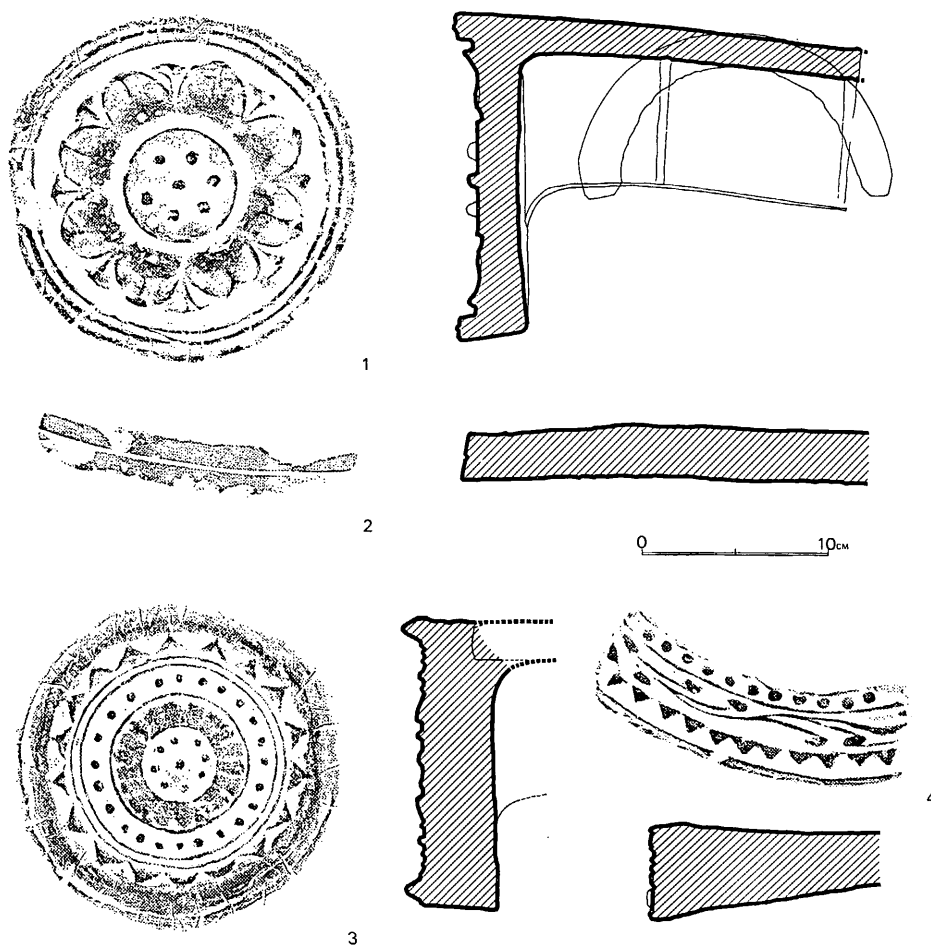
軒丸瓦（第5図1）は単弁八弁丸瓦で、今回2点出土した。瓦当径17.8cmで内区中房は大きく一段高い。周囲には溝をめぐらし1+6の蓮子を配している。蓮弁は幅が広く先端はやや尖り気味で強く反転している。外縁は中高の直立縁で一重の圈線をめぐらしている。瓦当裏面の一部には斜格子の叩きが残っている。瓦当と丸瓦の接合はきわめて外縁に近い位置で接合している。丸瓦部凸面は斜格子の叩きをていねいにすり消している。また丸瓦部凹面には図版6一



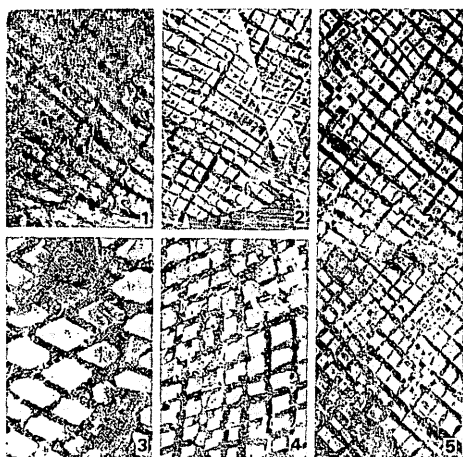
第4図 木山廃寺跡出土土器実測図(1/4)

5に示す如く、きわめて特徴的な痕跡が残っている。これと同じ例は豊前の垂水廃寺、法鏡寺からも発見されている。この痕跡からみて竹様のものを編んで成形台にしたものと考えられる。この軒丸瓦は第5図2と組合うものである。第5図3は内区蓮弁が不鮮明で複弁九弁と考えられるが、きわめて退化しており、単弁とも受取れる。中房は一段低く1+8の蓮子を配している。外区は内縁と外縁との間に二重の圈線をめぐらしている。外縁には外向する凸鋸歯文18個を配している。瓦当裏面はナデによって、ていねいに調整している。また丸瓦の取り付け位置は比較的外縁に近い。丸瓦部凸面は縄目の叩きを篋ナデにより、ていねいに調整している。軒平瓦（第5図4）と組合う。この軒先瓦の組合せは木山廃寺跡の北に約1Kmのところにある福六瓦窯から出土している。

軒平瓦（第5図2）は今回3点出土した。厚さ2.8cmの平瓦の端面に1本の沈線を施したものである。凸面には斜格子の叩き（第6図4）が残っている。豊前の垂水廃寺、相原廃寺に類



第5図 木山廃寺跡出土軒先瓦拓影・実測図（1/4）



第6図 木山廃寺跡出土丸・平瓦斜格子
叩き目拓影 (1/3)

いる。表面が黒く焼きあがったものが多い。この型式の軒平瓦は破片の断面の状況から粘土ひも巻き上げによるものと考えられる。

丸・平瓦は、今回の調査でセメント袋にして約100袋分ほどあるが、大半が小さな破片であり、全形を知り得るものはきわめて少ない。

丸瓦には玉縁丸瓦と行基丸瓦の2型式があるが、行基型式のものはきわめて少ない。また第1次成形にあたって粘土ひもを用いたものがある(図版6-7)。図版7-3は玉縁丸瓦で全長43cmで凸面は縄目の叩きをていねいにすり消している。凹面には布目が顕著に残っている。

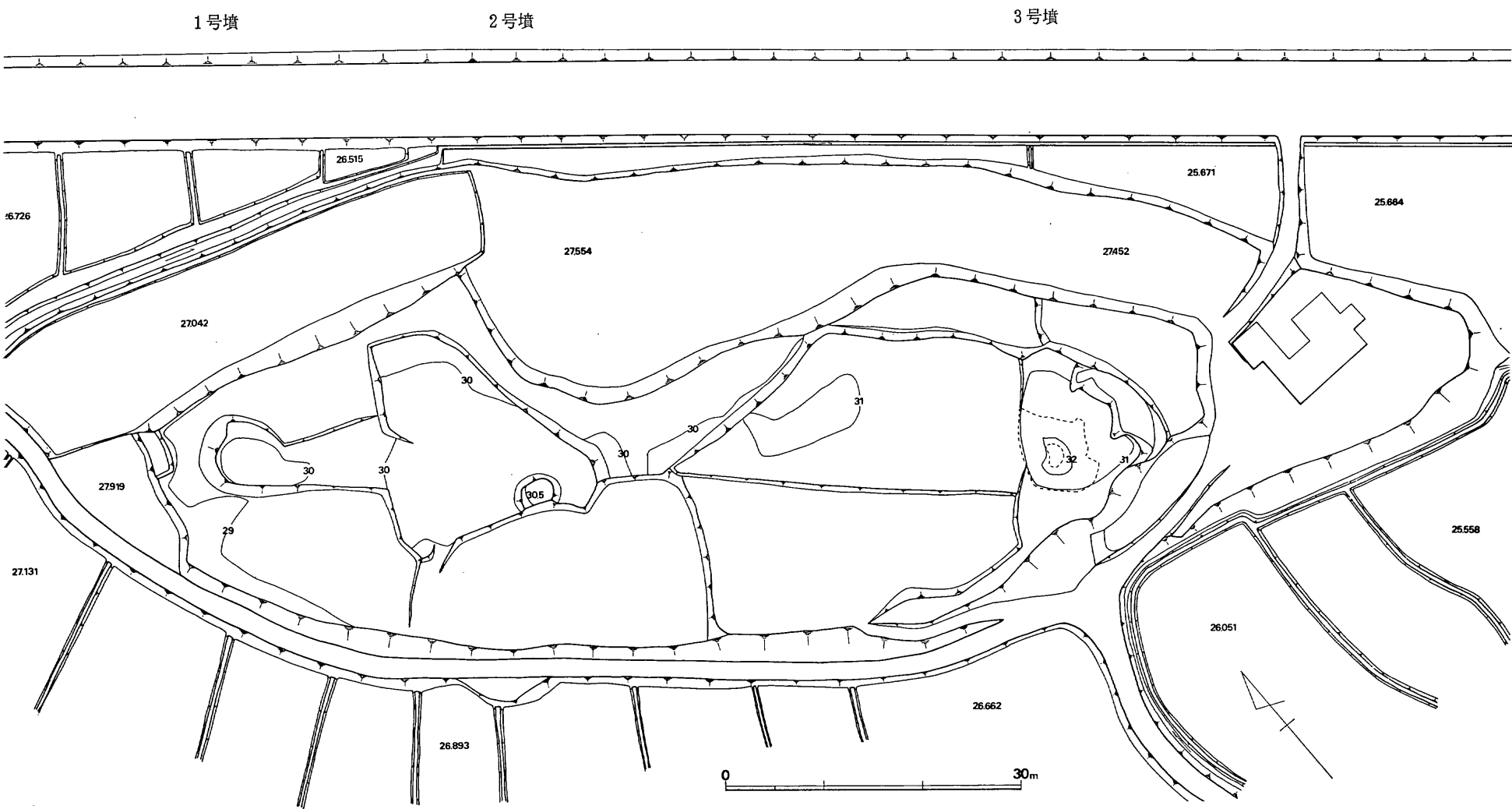
平瓦では縄目の叩きをもつものが圧倒的に多いが、第6図に示す如く斜格子の叩きをもつものが少量ある。図版7-1は全長41cmで凸面は縄目の叩きすり消している。また側面はていねいな篋削りで仕上げている。この平瓦にも丸瓦と同様少量ではあるが粘土ひも巻きあげによるものが認められる。

2. 谷口1, 2, 3号古墳

谷口1, 2, 3号古墳は、所謂谷口古墳群の一支群であり、扇状地にある低台地上に所在する(第8図)。北西から1号墳, 2号墳, 3号墳とする。全て開墾により墳丘が削られており、2号墳および3号墳が、その一部を残すのみである。

1号墳(図版8-1・2, 第8図) 墳丘(封土)は全くない。石室の腰石を残すのみで、玄室の平面形が判明する程度のものである。玄室長約2.95m, 玄室幅約2.1mの小石室である。使用石材は比較的小さく、花崗岩を使用している。南西側の袖石が残っているが、石室前面の調査の結果からみて、単室の石室であると考えられる。石室内床面には、挙大よりやや大きめ

例が知られている。第5図4は内区に左から右へ向って流れる偏行唐草文を配した所謂老司式と呼ばれているものである。今回43点出土した。この老司式の祖型とされている老司瓦窯出土のものは瓦当面に主軸ともなるべき1本の波状線を入れ、その上下に頭部が旋回する2個の唐草文を配しているが、今回出土のものは蔓草の頭部が一種の珠文状のものになっており退化形式といえる。上外区には珠文を下外区および脇区には外向する凸鋸歯文を配している。頸は段頸になるものと直線頸のものがある。平瓦部の凸面は縄目の叩きをていねいにナデつけて



第 7 図 谷 口 1 ~ 3 号 古 墳 地 形 図 (1/600)

の河原石が敷いてあったものと考えられる。全て盗掘により散乱している状態であった。

石室の構築にあたっては、事前に地山を整形し、掘り方を掘ったものと考えられるが、掘り方が非常に浅かったのであろうか、確認できなかった。

遺物の出土はない。

2号墳（図版9-1） 谷口の3基の古墳のうち、最も保存のよくないものである。北西側に墳丘の一部が若干残っているのみで、石室の石材も全て抜き去られ、掘り方が確認できたの



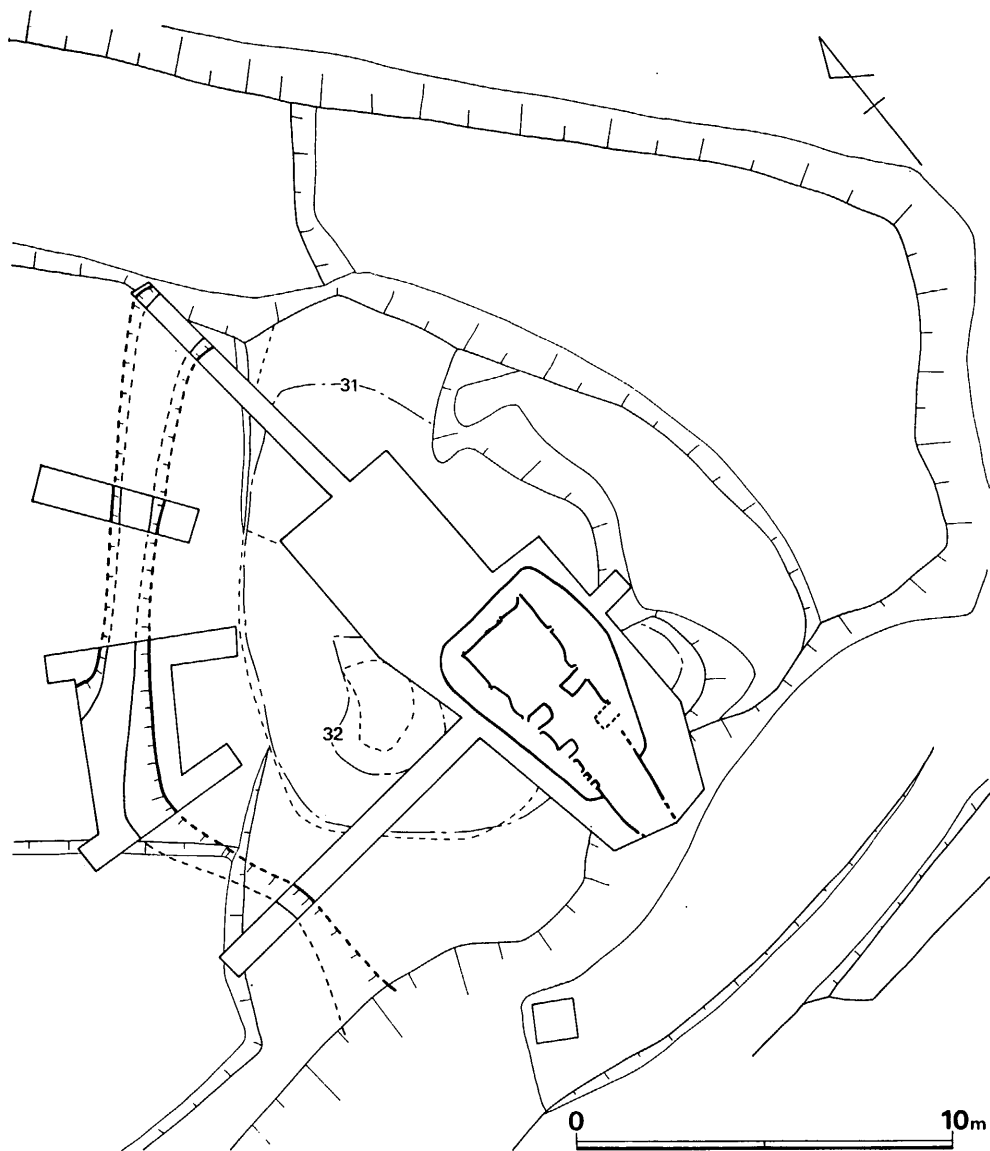
第 8 図 谷口1号古墳石室実測図 (1/40)

みである。石室の平面形，規模は不明である。

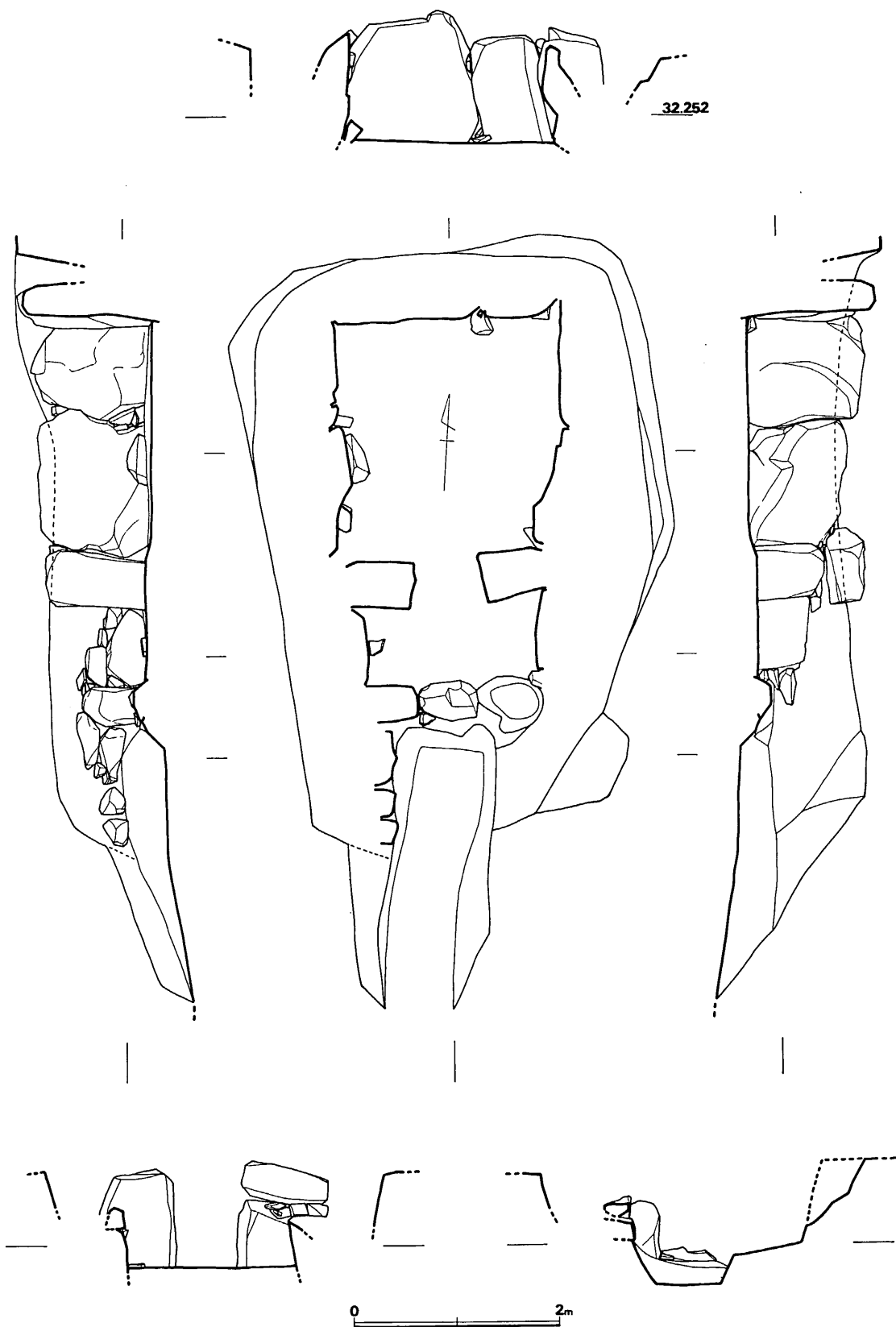
3号墳（図版9-2～10-2，第9，10図） 他の古墳に比べ，割合に残りのよい古墳である。台地上の最も高い位置に所在するものである。

石室の構築にあたっては，事前に地山を整形し，墳丘の平面規模を決定し，掘り方を掘っている。掘り方は，旧地表面から掘り下げており，不正形なプランを呈する。

また，墳丘の北西側に台地を切断するようにU字溝があり，これが3号墳の周溝の一部である。



第9図 谷口3号古墳発掘区実測図 (1/200)



第 10 图 谷口 3 号古墳石室実測図 (1/60)

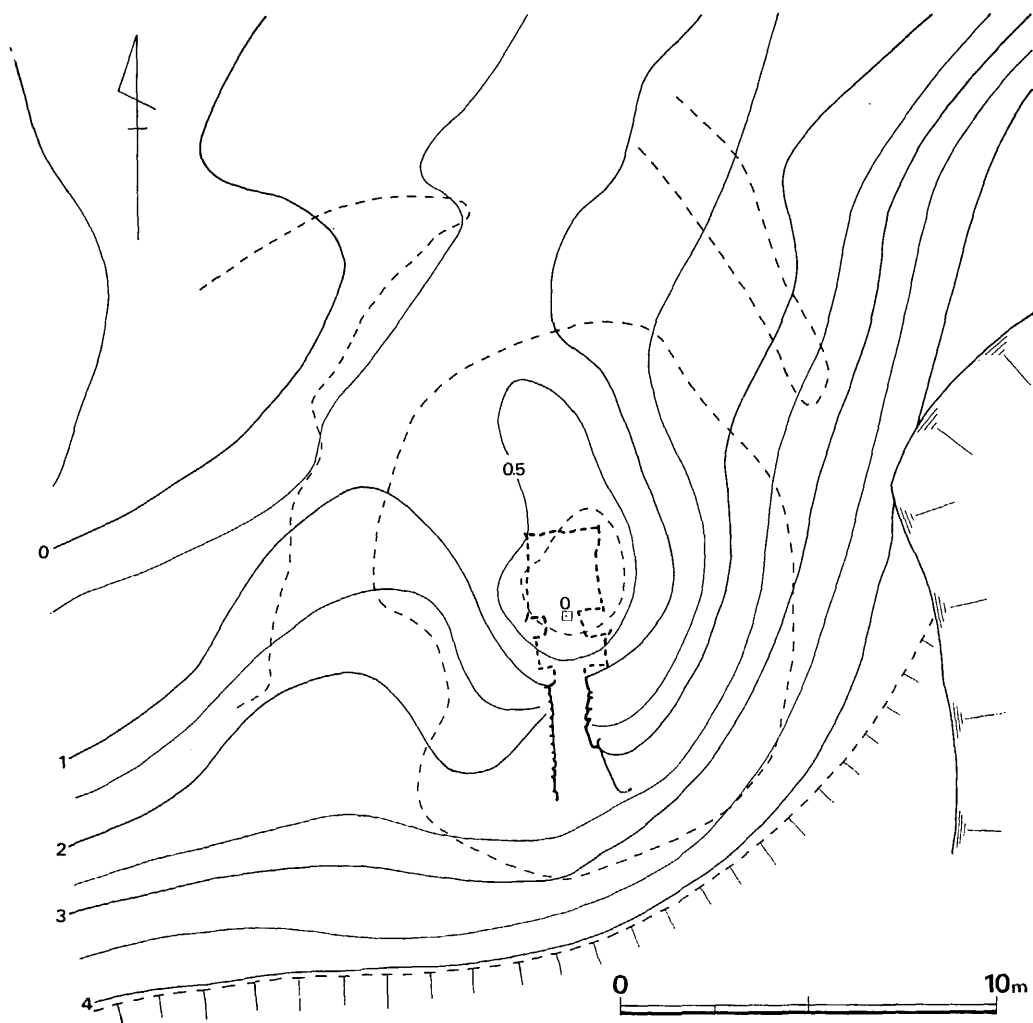
るかは、墳丘周囲のほとんどが削平されており正確につかめない。

石室は腰石のみを残すのみで、平面形が判明する程度である。複式の横穴式石室で、主軸長約3.9 m、玄室長2.3 m、玄室最大幅約2.1 m、前室長約0.8 m、前室最大幅約1.7 mで、これに約1 mの羨道と墓道が取り付けられている。

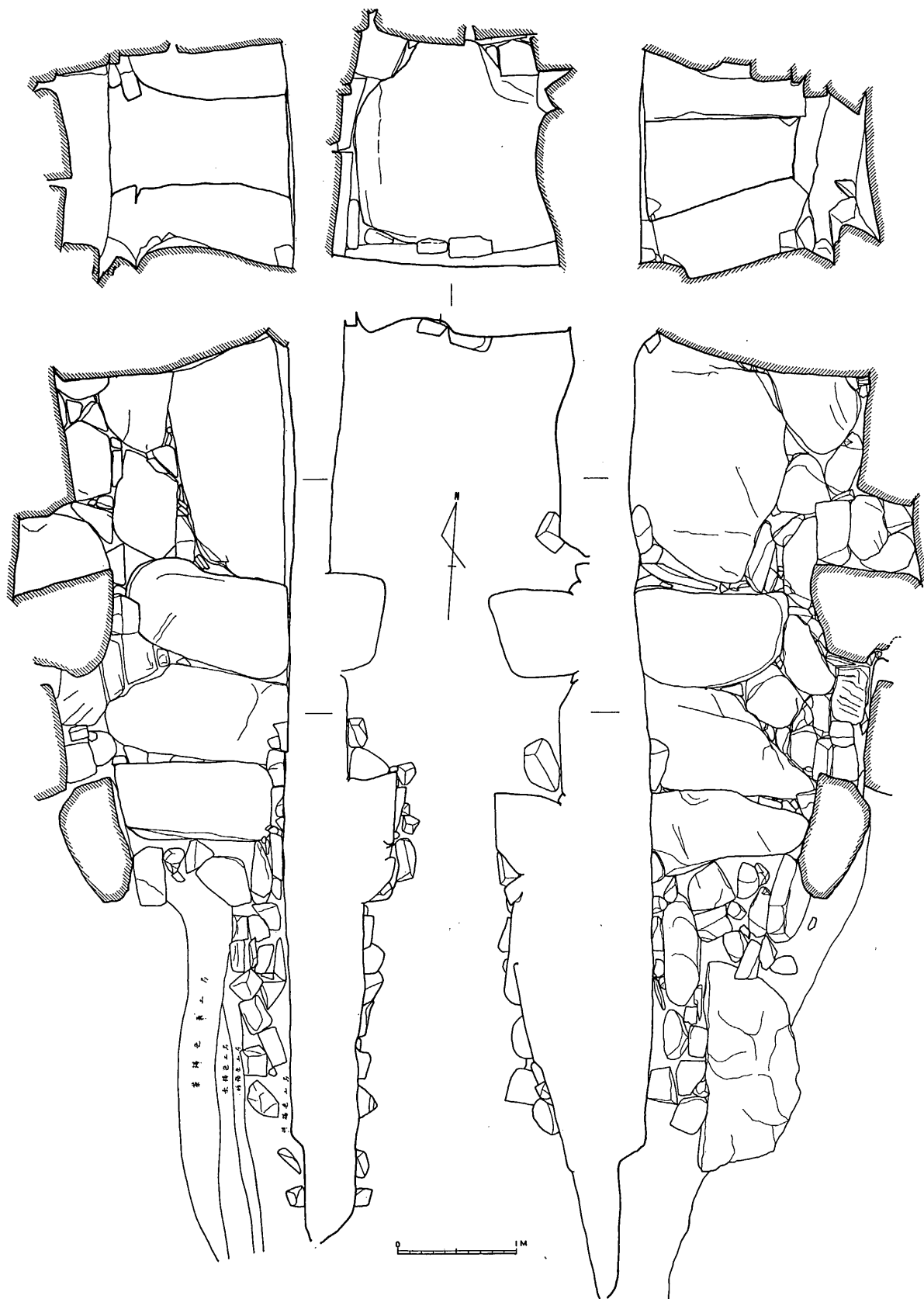
石室に使用された石材は割合い小さく、玄室の腰石は石面が整っていないく、他の古墳の用材を考慮すると、用材の調達に苦慮したものと考えられる。

羨門部の框石は断面が三角形を呈する小形の石を置いたものである。玄門部の框石は検出されなかったが、調査の結果からして、当初から設けられていなかったものと考えられる。

遺物の出土はない。



第11図 谷口大無田古墳実測図 (1/200)



第 12 図 谷口大無田古墳石室実測図 (1/50)

3. 谷口大無田古墳

谷口古墳群に属する当古墳は、京都平野を貫流する今川の中心に、犀川町本庄を中心として展開する盆地の北部に位置し、今川北岸の大村の北、海拔 161 m の丘陵の北麓にこの丘陵から派生した尾根の末端に近く、南面して築造している。

墳丘 丘陵の尾根が少し南へ延びた自然の高まりを利用して構築された円墳で、前室の東側壁上部と羨道から盗掘を受けて開口し、石室内に容易に出入できる状態であった。

墳丘の径は南北14.7m、東西11.2m前後とみられる不整形円形であるが、西側の盛土が流失していると考えられる。南側墳丘裾と墳頂部の比高は約3m、尾根筋に近い北側は0.7mであるが裾はいずれも判然としない。

なお、羨道方向から最大に見えるように築造されており、大無田池方向（南）から見上げると墳丘の高さに比して堂々見え、墳頂からの眺望もよい。

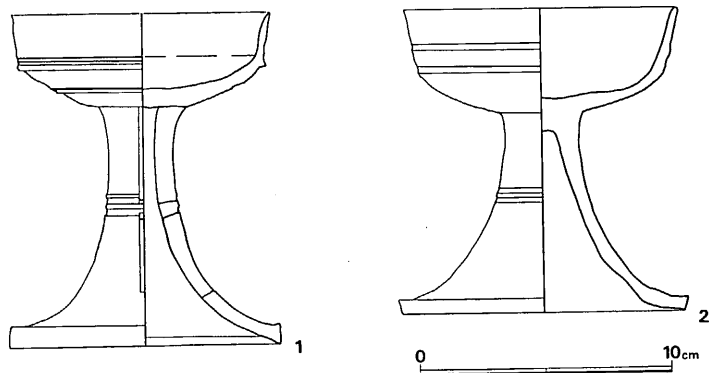
石室 用材として花崗岩の自然石を使用し、南面する前室・後室をもつ複室の横穴式石室である。墓道袖には石築がみられ、この端から後室（玄室）の奥壁まで7.2m、後室奥行2.2m、同幅員1.9m、同天井高2.3m、前室奥行1m、同幅員1.8m同天井高1.8m、である。羨道は楯石のみ残っているが、本来はその前にもう一枚天井石を架構したものであると思われる。奥壁は大形一枚石を用いている。

墓道は小形の塊石を使って袖築をしているが、東側上部にのみ、大形の石を使用している。後室、前室ともに本来は玉砂利を敷石としていた形跡があるが、後世の攪乱を受け、今は本来の姿を留めない。墓道は地山を多少掘り下げたものと思われ、袖積みの部分から先は西に彎曲する形勢を見せ、羨門に向って、丘陵斜面を直登するのではなく、西側から斜めに緩傾斜を以ってつけられていたものらしい。

遺物 石室の内部は盗掘により荒らされ、鉄製馬具の残片1点を検出したのみであり、副葬

品の実態を明らかにする資料は得られなかった。

土器類は、羨道から墓道にかけて検出したもので攪乱土中から須恵器の俵形壺、甕等が出土した。このなかには石室内から掻き出された物が含まれている



第13図 谷口大無田古墳出土須恵器実測図（ $\frac{1}{4}$ ）

かもしれない。

また、墳裾に近い墓道左側の小窪地から須恵器の高坏2個・甕、土師器の高坏・坏等の破片等が一括して出土し、ほぼ原位置を保つと思われ、近くではかなり炭が検出されるなど、墓前祭祀の性格を窺わせるものである。

馬具は前室床面に錆塊として検出されたが、断面から見れば、尾錠金具である。

須恵器高坏が2点出土している（第13図）。一部が欠失しているが、復原すれば良好な形をなしている。1は垂直に近く立ち上がる口縁下に突帯状に張出しをもち、脚の取付け部分との間に2条の沈線を施し、突帯とこの沈線の間には、斜めに篋による押捺文が見られ、ラッパ状の脚部は中央部に2条の沈線をもち、坏部直下から始まる長方形透孔は沈線部で上下に分離され、脚の前後両面に穿たれている。2は1に比較して脚が低く、透孔はなく、沈線は坏部下半に2条、脚部中央に2条施されている。焼成は共に堅緻に焼かれ、一部に自然釉の風化脱落した形跡が認められている。

このほかに須恵器では俵形土器、甕形土器と土師の高坏および坏の破片が発見された。

俵形土器は、卵形をなす本体の一端を残すのみであるが、焼成良好で器表に飴色の自然釉を覩る。成形の際の細い平行叩文が器表に印され、内面の同心円叩文はロクロ成形により消去されているが、僅かにその痕跡を残している。

甕は青灰色の焼成良好なものであり、胴部と底部の破片のみであり、全形を知る由もない。細い格子状叩文を器表に、同心円叩文（青海波）を内面に残している。なお、器表はロクロによる粗い刷毛状の器面調整痕が認められる。

土師器高坏は、比較的小形のものの坏部破片であり、明赤色を呈し、水篩された精良な胎土である。坏部の下方に段があり、脚部の嵌入痕を残している。土師器坏は、小形の赤褐色を呈する半球形にちかい坏である。胎土は砂粒の混入が見られるが、緻密な土を使用している。

考察 墳丘の西側は内部の石材の一部が露出するなど、土砂の流失が認められたものの、ほぼ旧状を保ち、当古墳が丘陵の稜線南側に築造された当時、封土は稜線に近い部において、周濠を掘ることによってまかなわれ、更に石室構築にかかる掘り方の掘削の際の土砂も併せて使用したものと考えられる。

内部主体については、天井高を低く抑えることにより用材の数量を節減した模様で、構築も比較的粗雑である。

内部主体内の埋葬状況等については、後世の攪乱を受けているため不明であり、羨道部の閉塞も同様不明であったが、内部から掻き出されたと思われる少量の須恵器片が検出された。

墓道に遺存した須恵器高坏および甕の破片から、当古墳の埋葬のある時期が、須恵器第4様式である。即ちA・D6世紀後半頃にあたることが判明した。

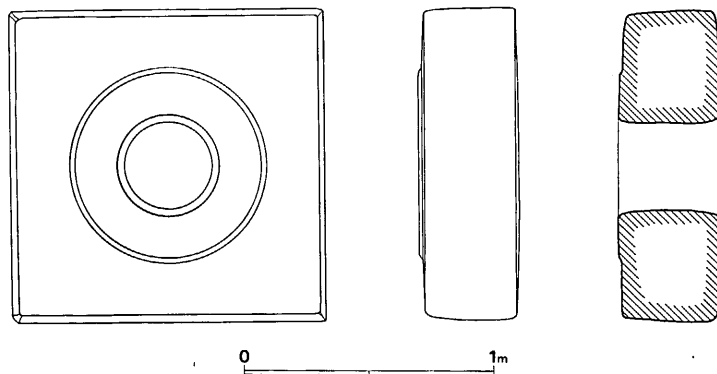
当古墳を含む谷口古墳群を形成した犀川の地域社会は、引続き8世紀に木山廃寺を営み、更に交通上の要衝であった関係上、今川の南岸に続命院の設置を見る。

4. 木山廃寺跡出土輪蔵心礎

木山廃寺跡の東端に近い位置に発見されたこの心礎は花崗岩を使用し、一辺 125 cm の正方形をなし、中心孔の部分で厚さ 40 cm で、貫通する中心孔の径は 35 cm、上部造出しの部分で 40 cm、造出しの径 79 cm であり、造出しは 2 cm 程浮出すように造っている。

経巻を納めた輪蔵の中心軸を受ける礎石であり、宇佐弥勒寺跡に鎌倉期のものが現存している。豊前地区では、北九州市小倉と田川郡川崎町に江戸時代の輪蔵が現存するが、古い時期のものは本例を除いては見られない。

木山廃寺跡は、既に鎌倉期には廃絶した事を伝え、本心礎は密教との関係を考えれば、平安期に属することが考えられる。地元では古くから「後生車」の伝説を伝え、これがこの輪蔵に由来するものと思われる。

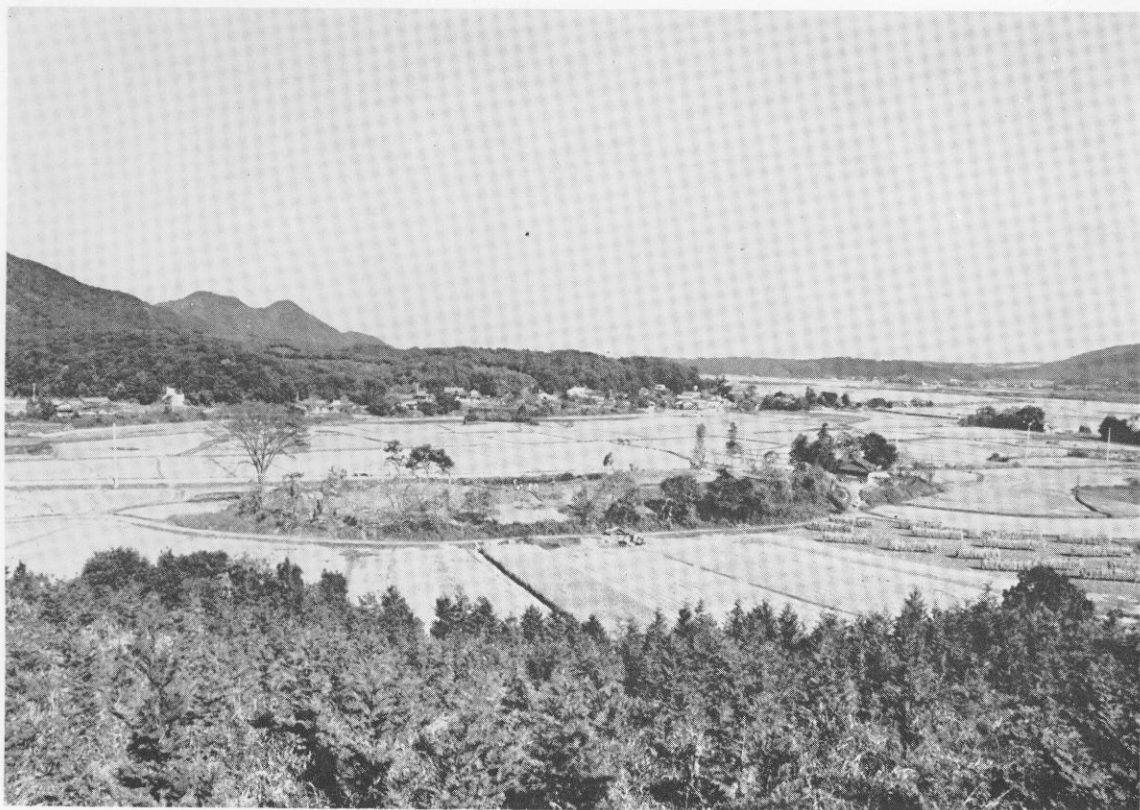


第14図 木山廃寺跡出土輪蔵心礎実測図 (1/30)

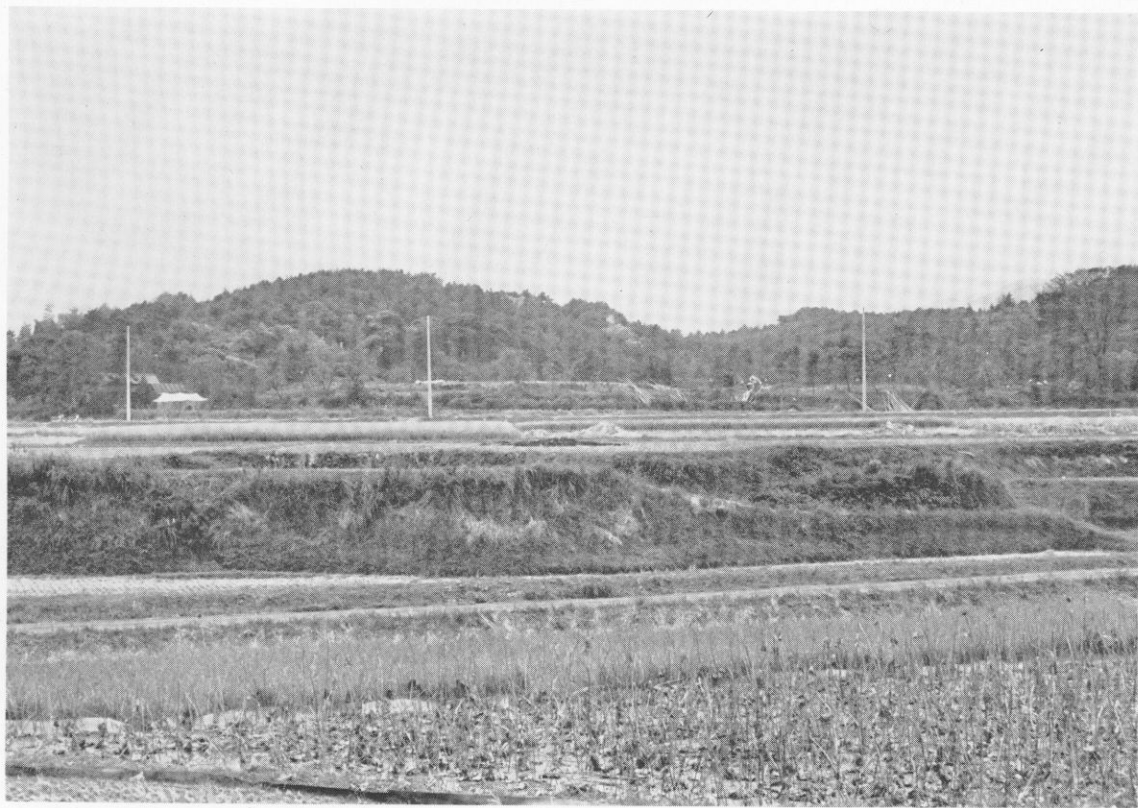
図 版



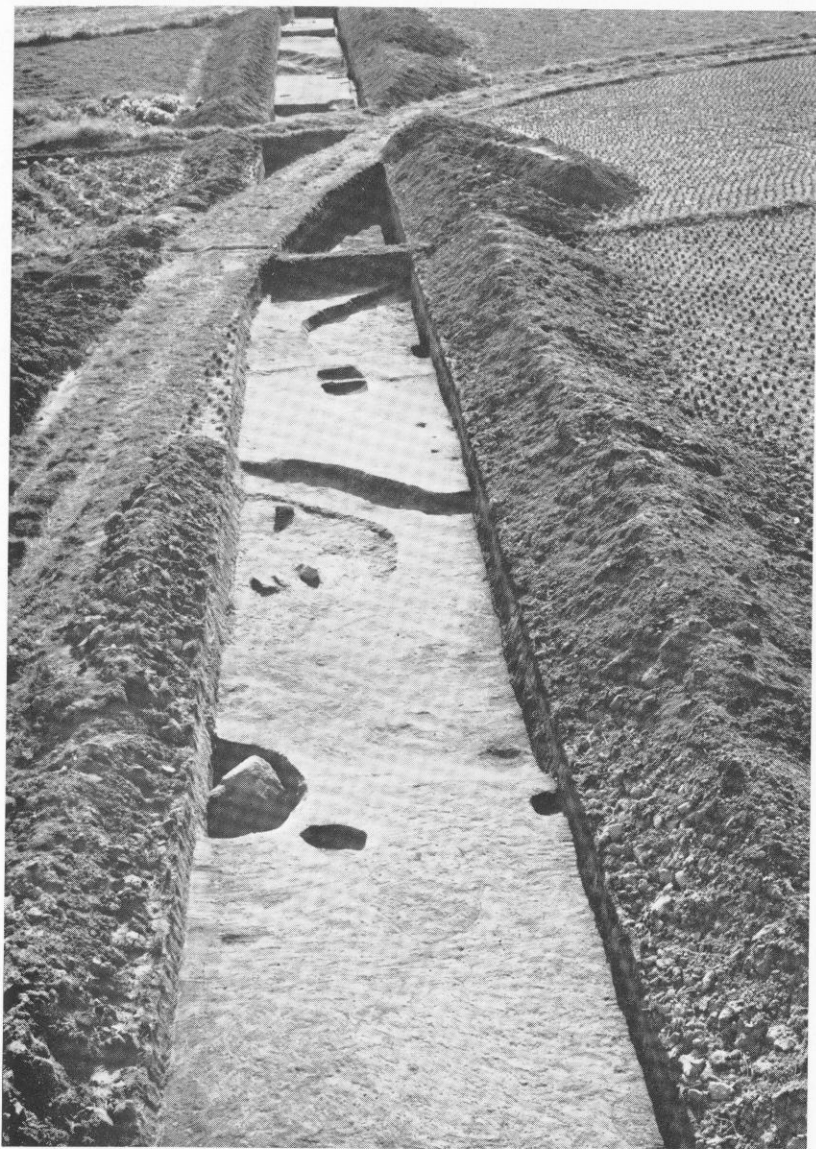
(1) 木山廃寺跡付近航空写真



(1) 木山廃寺跡・谷口古墳(1～3号)遠景(西から)



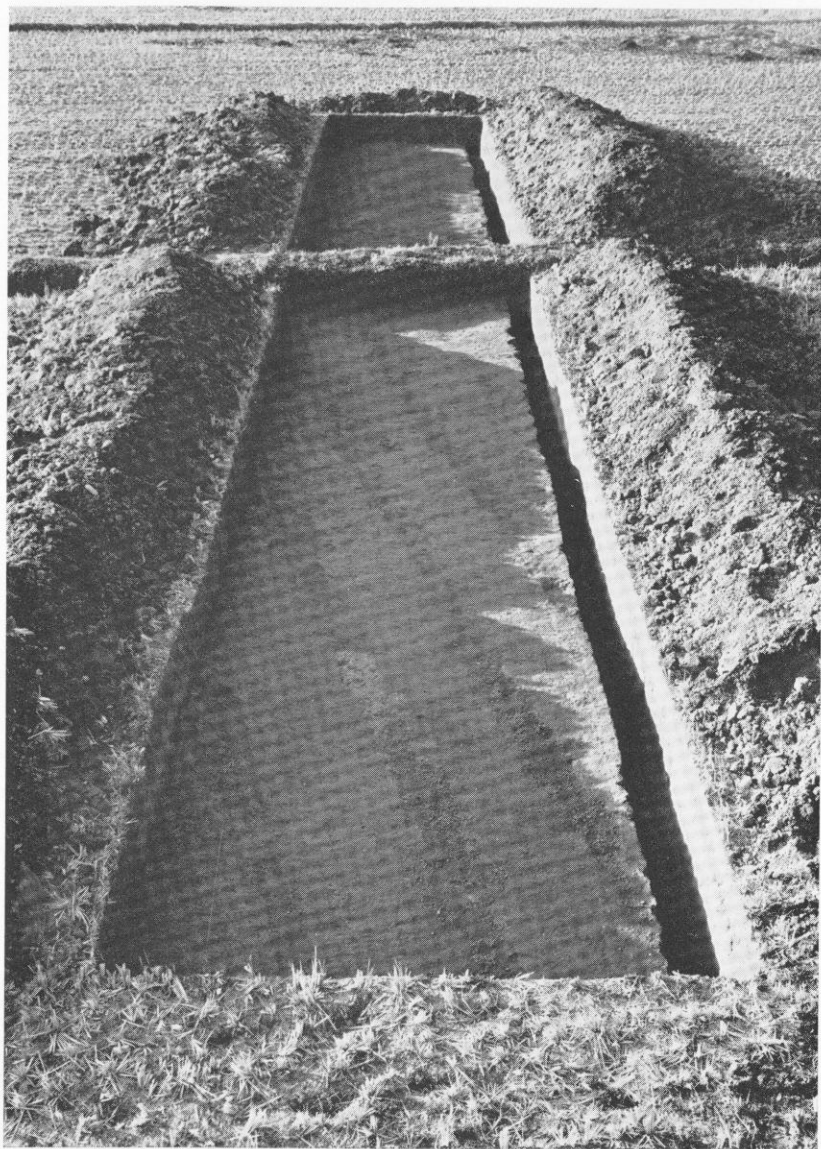
(2) 木山廃寺跡・谷口古墳(1～3号)近景(東から)



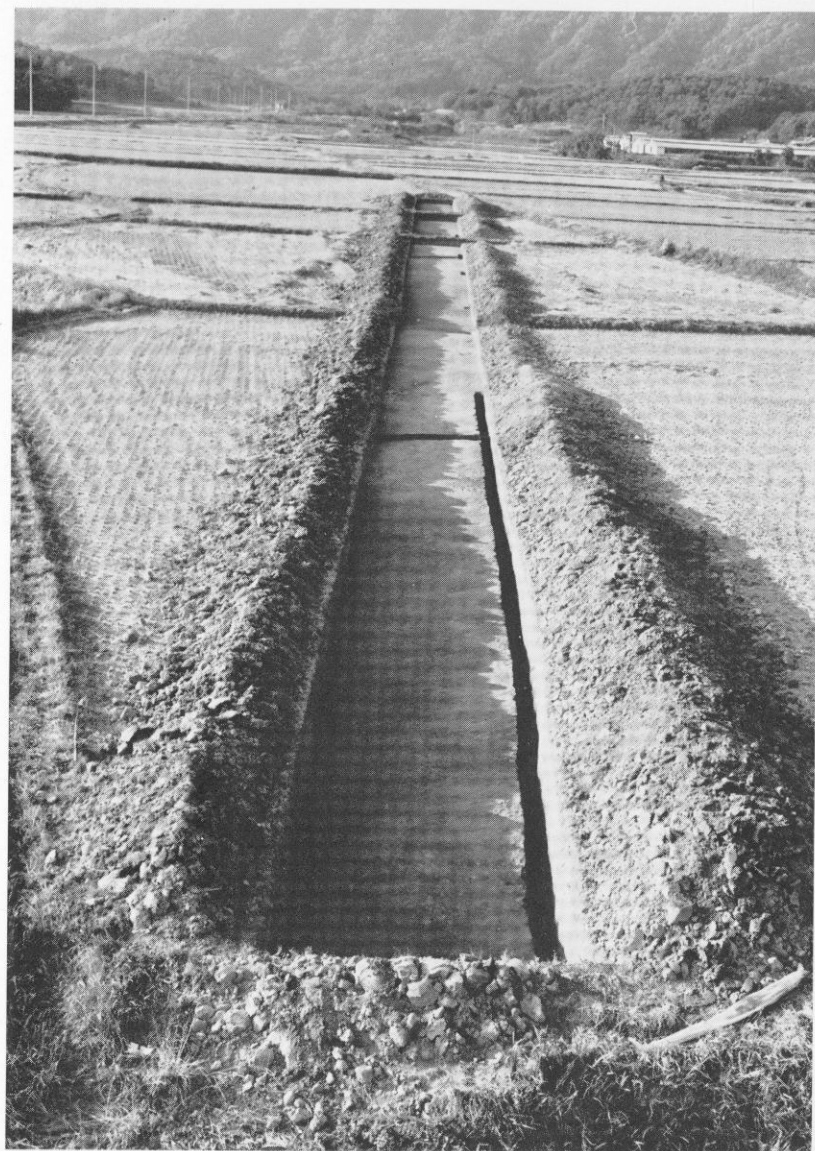
(2) 木山廃寺跡Aトレンチ（北東から）



(1) 木山廃寺塔心礎



(2) 木山廃寺跡Cトレンチ (南東から)



(1) 木山廃寺跡Bトレンチ (南東から)



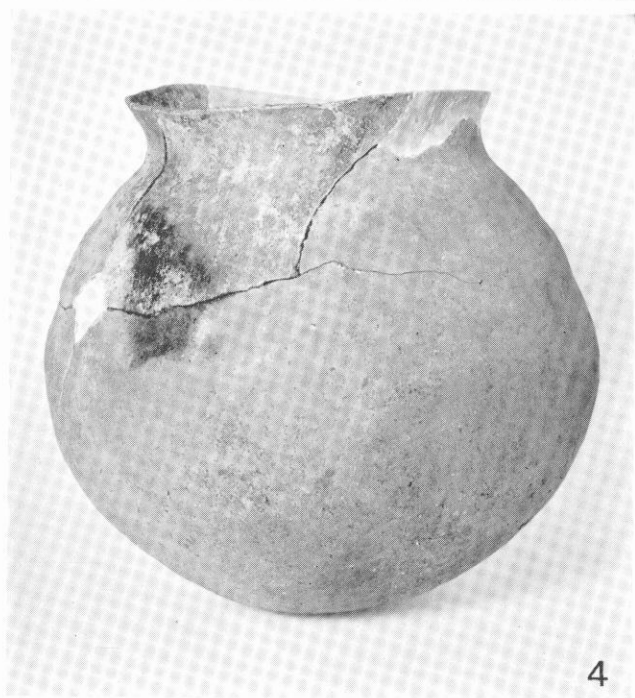
1



2



3



4

(1) 木山廃寺跡出土土師器

1 高 坏 2 坏 3 高 坏 4 壶



1



2



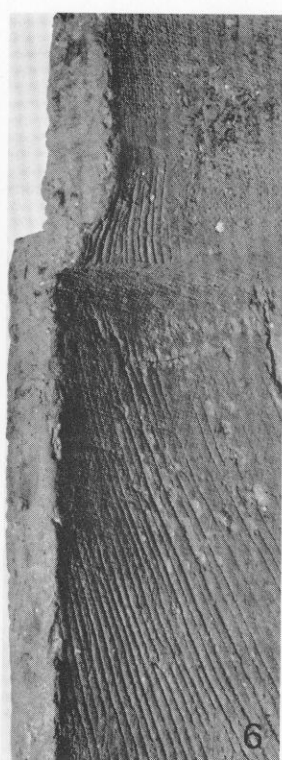
3



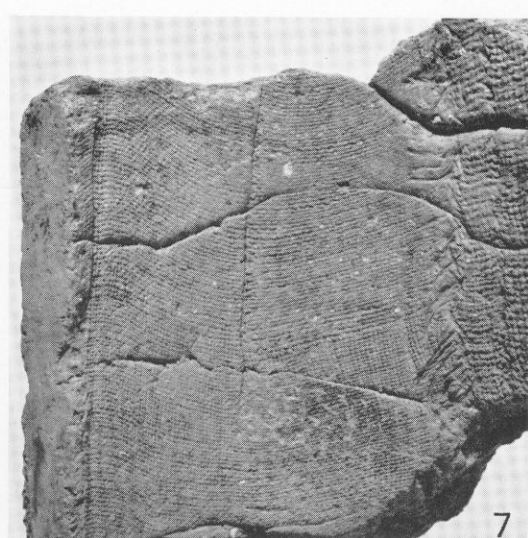
4



5

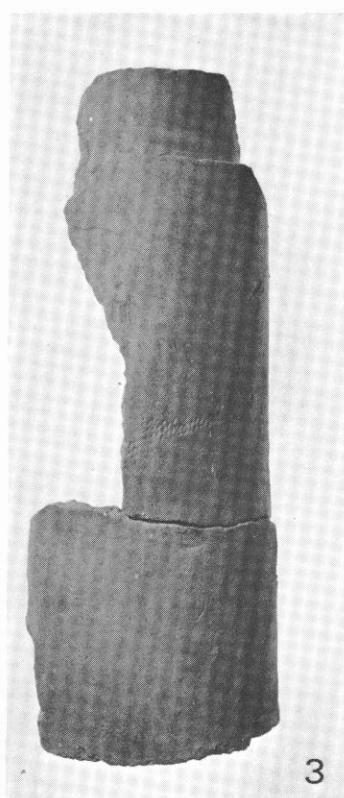
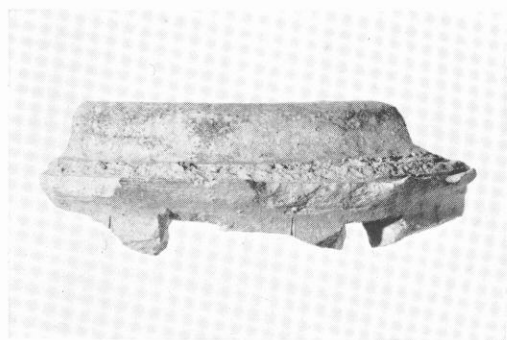
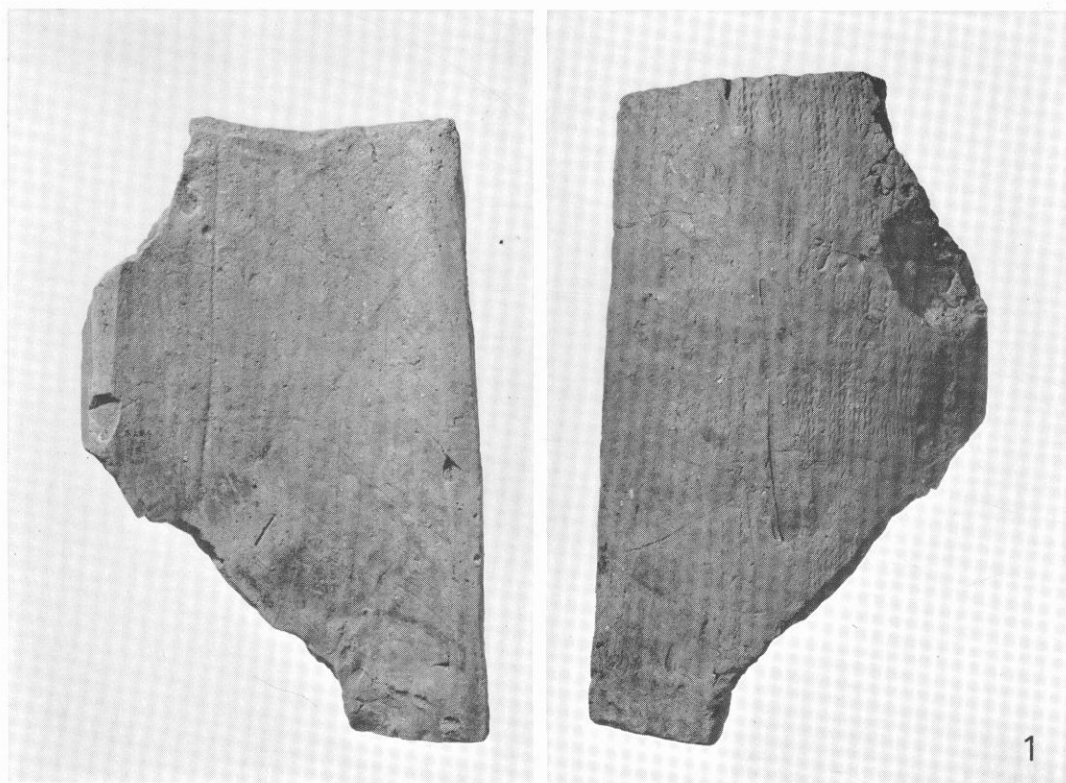


6



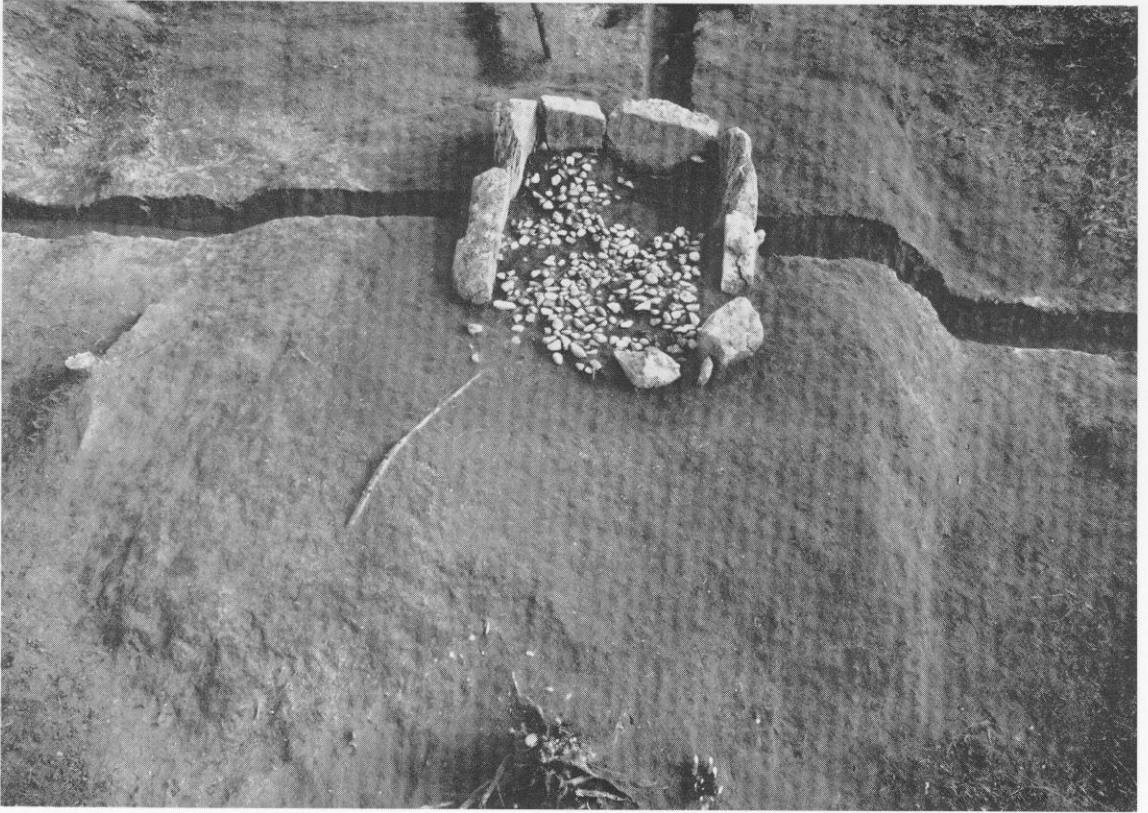
7

- 1 単弁軒丸瓦 2 複弁軒丸瓦 3 重弧文軒平瓦
4 偏行唐草文軒平瓦 5 単弁軒丸瓦丸瓦部凹面痕跡
6 粘土板いと切痕跡 7 丸瓦粘土ひも痕跡

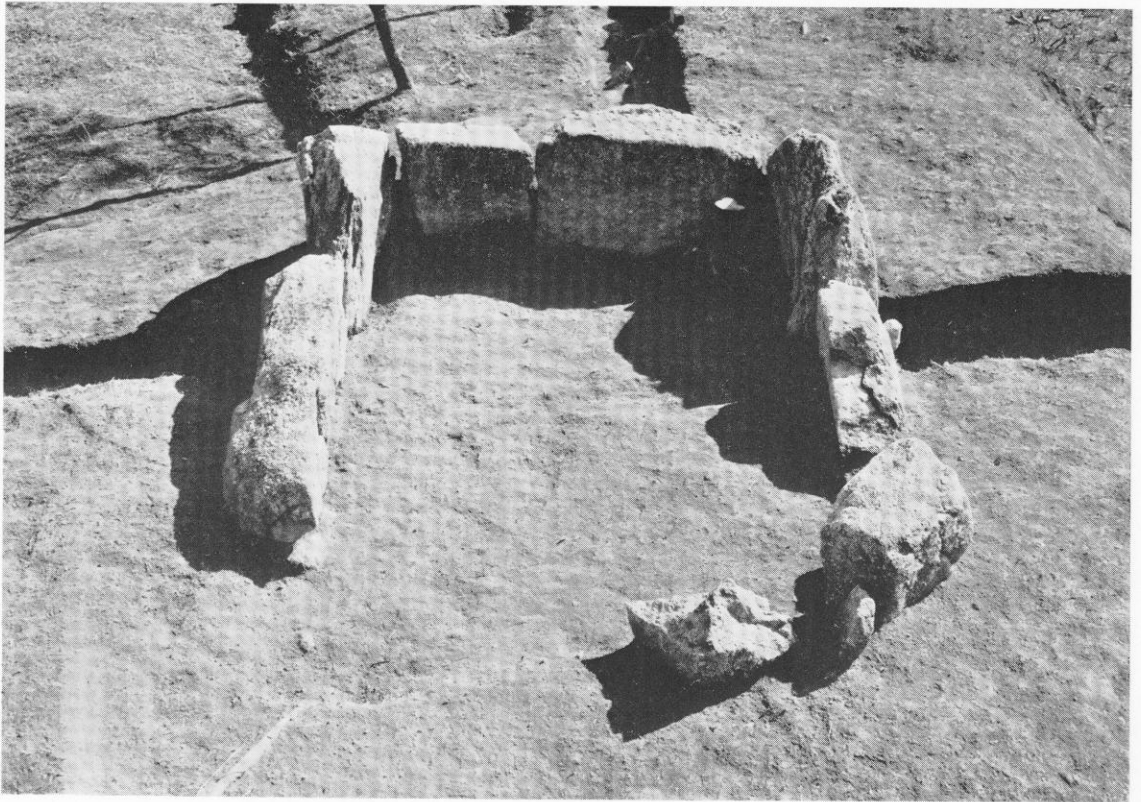


(1) 木山廃寺跡出土瓦・須恵器

1 平 瓦 2 円 面 硯 3 丸 瓦



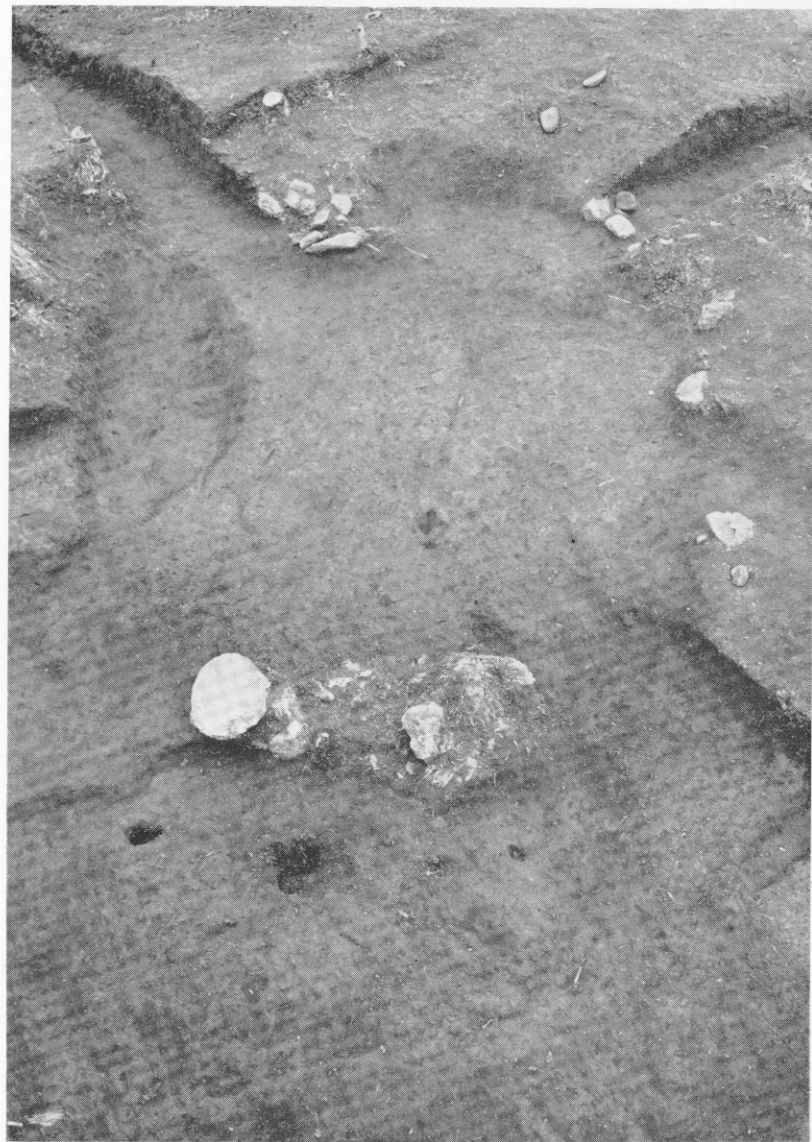
(1) 谷口1号古墳（北西から）



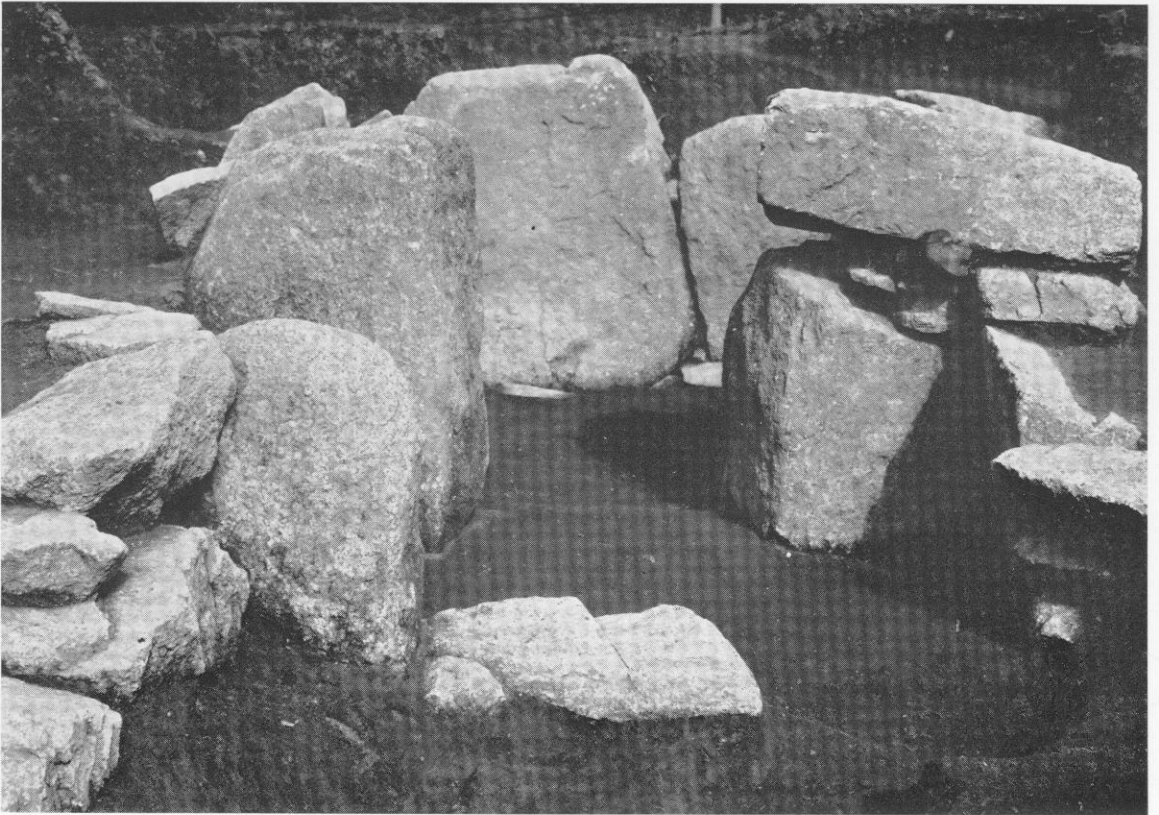
(2) 谷口1号古墳石室（北西から）



(2) 谷口3号墳石室(南から)



(1) 谷口2号古墳(南西から)



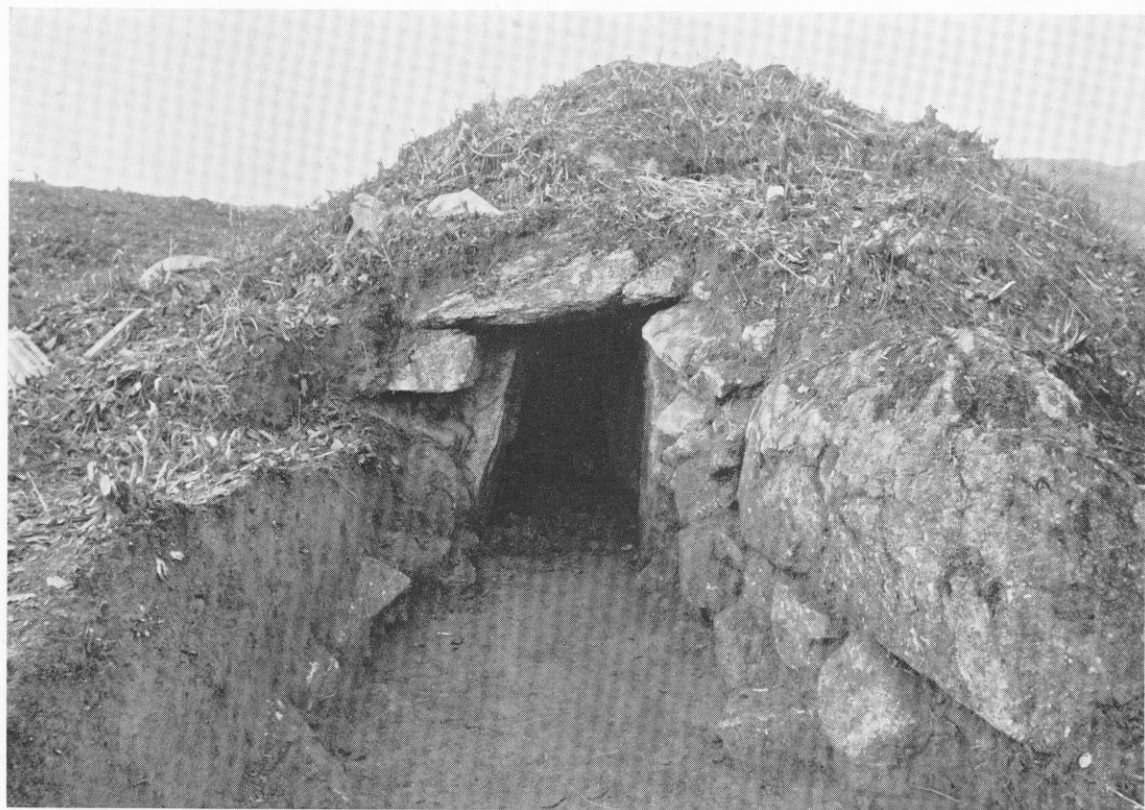
(1) 谷口3号墳石室（南から）



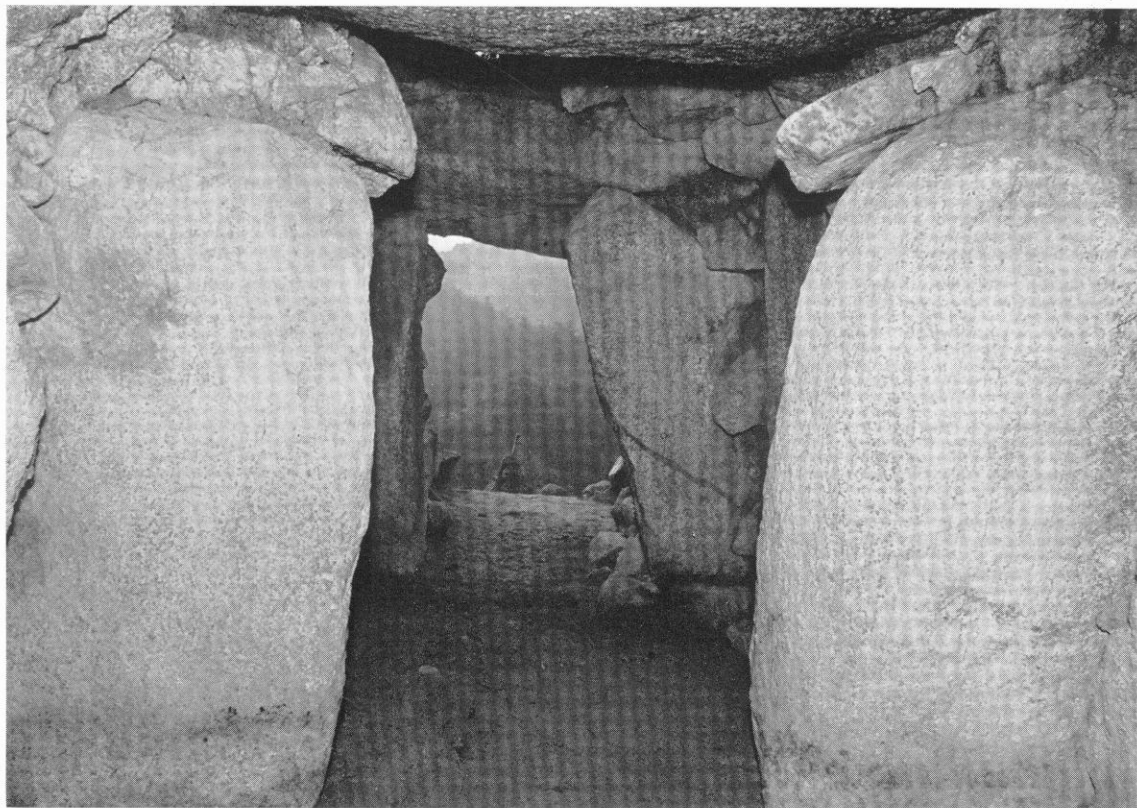
(2) 谷口3号墳石室（東から）



(1) 谷口大無田古墳遠景（東から）



(2) 谷口大無田古墳正面（南から）



(1) 谷口大無田古墳石室内部



(2) 谷口大無田古墳墓道出土須恵器

木 山 廃 寺 跡

昭和50年3月31日

発 行 犀 川 町 教 育 委 員 会
福岡県京都郡犀川町本庄

印 刷 福 博 綜 合 印 刷 株 式 会 社
福岡市博多区堅粕3丁目16-36